これからのトラクタ選択＆活用術を語ろう



8月2～3日に関東甲信越土を考える会の2011年度夏期研修会が開催された。初日は千葉県柏市の柏染谷農場に集まり、5年目の挑戦となる乾田直播の圃場視察からのスタート。場所を移して、乾田直播の実践報告会が行なわれた。同農場が導入3年目を迎えた早期播種乾田直播の取り組み、大規模の経営における導入についての講演に参加者は熱心に耳を傾けた。

翌3日、夏期研修会としては異例のトラクタ・作業機の実演会が行なわれた。会場をお借りしたのは、千葉県香取市の㈲こうざき自然塾が管理している、今年作付けできなかった圃場である。未だに農道の凸凹、陥没はそのままで、液状化で地下から上がってきた砂が圃場や道路を覆っている。代表の鈴木一司氏は「神崎（こうざき）地区はもともと沼だったので、3月の大震災で液状化被害の影響が大きく、60㎝地盤が下がったところもあります。川が隆起して水田より水位が上がってしまい、水が吐けません。また基盤整備で地下に埋めた用水と排水のパイプラインが壊れて、水稲の作付けができない状況」と語った。自前の機械体系を駆使して、圃場にできた30㎝ほどの段差を整地して、一部の圃場を除いて水稲の代わりに大豆を播いて転作対応した。

ヤンマー EG105＋リバーシブルプラウ



クボタMZ655＋バーチカルハロー



クボタKL58ZH＋スタブルカルチ



クボタM125A＋ドリルシーダー



ヤンマー CT1000＋レーザーレベラー



井関農機TJV85C＋レーザーレベラー



液状化の被害を受けた圃場をどのように復旧できたのか。それは、日頃から揃えてきたトラクタと作業機があり、フル活用できたからに他ならない。実演の中でも、畔を取り崩して2枚の圃場を1枚にする作業も実際に行なわれた。

今回集まったトラクタは、今年、メーカー各社が発表したセミクローラトラクタである。パワクロに力を入れてきたクボタに、井関農機のT・Japanシリーズ、ヤンマーのEG105が加わり、ユーザーの選択肢が広がった。

クローラトラクタの弱点で指摘されるのが、足回りのメンテナンスと耐久性であろう。新しい機種は、クローラのスプロケット穴がなくなり、内側の転輪にスクレーパを備え、泥の付着を軽減し、クローラ本体のシンプル化が図られているようだ。

参加者による意見交換の場で多く聞かれたのは、部品交換程度で壊れない、一日中乗っていても疲れない、夜間作業にも明るく照らすライト付トラクタがほしいという要望である。適期にどれだけ作業ができるのか。規模拡大で大面積を抱える農業経営者にとっては、トラクタと作業機の選択、そして複数台の機械を使い分けるノウハウがあってこそ乗り切れるのではないだろうか。


トラクタだけでなく、ドリルシーダーにも注目。



女性でも運転しやすい。プラウ作業にて試乗。

最新セミクローラトラクタ大試乗会


ヤンマーGL155でサブソイラ作業。ホイールとどう使い分けるか。

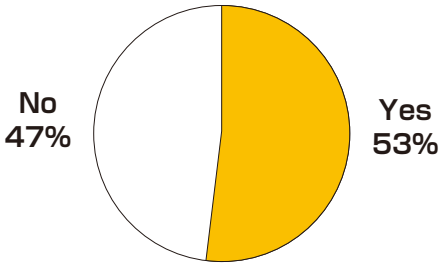

ヤンマーCT1000フルクローラで直装式のレベラー作業を体験。



【会員へのアンケート調査】

●セミクローラトラクタを導入していますか？

（回答数：30人）



【メリット】

- 牽引力がある
- 踏圧が低い
- 湿田に強い
- 悪条件の圃場でも作業できる
- 道路走行時の振動が少ない

【デメリット】

- ランニングコストが高い
- 圃場間の移送が大変
- クローラ周辺のメンテナンスに手間と費用がかかる
- 旋回時の土寄りがある
- メンテナンス、掃除が面倒

【要　望】

- 耐久性の高いトラクタ
- 部品の価格が高い
- 後方を照らすライトが少ない
- 1日運転しても疲れを感じないトラクタ

一般的な普及率に比べたら、53%という数字は驚異的な数字かもしれないが、同会の東北エリアでは7割を超えるという。プラウやレベラーの導入、作業面積の拡大など、トラクタをいかに有効に活用するかを考えた結果、セミクローラが選ばれているようだ。



クボタM１２５Ａを試乗。実際に乗ってみると欲しくなってしまう!?



井関農機TJVシリーズのエンジンはコモンレール式で電子制御噴射エンジン搭載。

関東甲信越の各県から集まった精鋭たち。地域でも先進的に新しいトラクタを使い始め、規模拡大や新技術の導入をリードしている。この日も多収品種、乾田直播の試行錯誤の情報交換の場となった。



千葉発！早期播種
乾田直播の取り組み



千葉県が進める乾田直播は3月下旬から4月上旬に播種を行なう「早期播種」技術。2月下旬から均平・整地を進め、レベラーで田面を±2.5㎝に。管理作業は雑草防除は３回（ラウンドアップ、クリンチャーバスＭＥ、トップガン）、追肥も３回。収穫は移植栽培から5～7日ほど遅れで、収穫適期を広げられる。

「乾田直播5年目、早期播種3年目にして天候に恵まれてうまくいった」と語る染谷茂氏（柏染谷農場）。今年は水稲52haのうち11.2haで早期播種に取り組んでいる。雑草対策のために密植（条間20cm）、3月19・20日に5.5kg/10aをドリルシーダーで播いた。移植前に既に播種が終わっている安心感も導入メリットの一つ。

